

商学部FDウィーク2022

岸本 徹也^{*†}, 武田 圭太, 竹林 一志, 西山 秀人, 水野 学

日本大学商学部

Faculty Development Week 2022 at College of Commerce

Tetsuya KISHIMOTO, Keita TAKEDA, Kazushi TAKEBAYASHI, Hidehito NISHIYAMA, Manabu MIZUNO

College of Commerce, Nihon University

During the FD Week 2022 at College of Commerce, we exchanged opinions on what we noticed when we visited each other's open classes. The 15 classes held from November 4 to 17, 2022 included face-to-face classes, online classes using Zoom, and full on-demand classes delivered using class videos. At the opinion exchange meeting held on November 17th, the three instructors, who had received high evaluations from students, introduced key points from their own lessons. We discussed how to take questions from students, provide feedback to students, care for students, and so on. The following is a summary of the ideas and initiatives that can be used as a reference. (1) Teachers spend a certain amount of time refining class content and giving lectures using a variety of teaching materials and tools. (2) Teachers encourage students to actively participate in classes. (3) Teachers set aside time for students to exchange opinions with each other during class and let them share their thoughts. (4) Teachers prepare and review lessons by presenting assignments. (5) Teachers provide appropriate feedback in response to student questions regarding class content.

キーワード：授業参観, 授業参加, 双方向の授業, 学生へのフィードバック, 学生のケア

Keywords:

class observation, class participation, interactive class, feedback to students, care for students

1 はじめに

商学部のFD活動は、本部FD推進センター中期計画および本学部のディプロマ・ポリシーなどに依拠した本学部FD委員会ミッションに基づいて実施されている¹。本稿は、2022年度、このFD委員会ミッションの内容を実現すべく実施した「商学部FDウィーク2022」の内容について報告するものである。

2022年度の商学部FD活動は、教員が公開する授業を互いに参観し、授業参観後の意見交換会を企画し実施した。授業参観した教員が授業から何を学び、授業参観後の意見交換会でどのような議論があったのか、そこから本学部の教員が何を学びとったのか詳しく記述している。本学部教員はもとより、他学部の教員の方々にも、授業の方法、学生からの質問の受け方や学生へのフィードバック、学生のケア等、教員が日頃直

*E-mail: kishimoto.tetsuya@nihon-u.ac.jp

投稿：2023年2月9日 受理：2023年4月14日

[†]本稿の執筆にあたって、後藤裕哉氏、烏山芳織氏、田中真理子氏（いずれも商学部教務課）に資料提供等でお世話になった。記して謝意を表わしたい。

面している課題について共感していただけるところが多くあるのではないかと思います。教員の方々の授業改善に少しでもお役に立てるようなヒントが見つかることを願っている。

本稿の構成は、次のようなものである。この章に続く第2章では、本学部のFD活動を支えるミッションと中期計画の概要について説明した後、商学部FDウィーク2022の概要についてまとめている。第3章は、2021年度の学生の授業評価アンケートで評価の高かった授業を担当した3名の教員による「私の授業 ポイント紹介」の発表内容を紹介している。第4章は、授業参観後の意見交換会でグループ別の特定課題について議論された内容をまとめている。そして、最後の第5章では、商学部FDウィーク2022の全体を総括し、今後の課題を提示している。

2 商学部FDウィーク2022

ここでは、商学部FDウィーク2022の具体的な活動内容の紹介に入る前に、本学部のFD活動が依拠している本学部のFD委員会ミッションの内容がどのようにFD活動に落とし込まれているのかという点を確認しておきたい。

2.1 本学部FD活動の考え方

現在の本学部のFD活動は、本部FD推進センター中期計画（令和3年度から令和5年度）および本学部のディプロマ・ポリシーなどに基づき作成された本学部FD委員会ミッションの実現を目指し実施されている。

本学部FD委員会ミッションは次の4項目から構成されている。

- ① 日本大学教育憲章および商学部ディプロマ・ポリシーに基づく教育を行うための、教育研究能力の獲得を目指す。
- ② 教員の教育研究活動等の自己点検・評価の実施により、教員の能力向上を推進する。
- ③ 商学部FD活動の成果とその充実を支援する情報を収集し、学部内外へ効果的に発信する。
- ④ 商学部FD活動の改善を図る組織的取り組みを実施する。

この本学部FD委員会ミッションに基づき、令和3年度から令和5年度の中期計画において次のような活動の目的を掲げている。本学部のディプロマ・ポリシー、特にグローバルビジネス社会に対応できる実学を中心とする教育を行うためのFDイベントの企画開催等を通じて、全専任教員が学生への十分なフィードバックを含めて本学ならではの授業（カリキュラム）プランニングができるための教育改善活動を推進していく、というものである。

本稿で報告させていただく2022年度の商学部FDウィーク2022における活動はこのような枠組みのもとに実施された。2022年度は特に、前年度の実践状況を授業評価アンケート等の結果から把握し、更なる教育改善を図っていくことを目指したものとなっている。

2.2 商学部FDウィーク2022の概要

実施した内容は、対面授業・オンライン授業の参観とオンデマンド授業の視聴および授業参観後の意見交換会である。教員から公開可能な授業を募った結果、対面授業・オンライン授業・フルオンデマンド授業、合わせて15の授業が公開対象となった。Google Classroomに、「商学部FDウィーク2022～授業参観～」のクラスを作成し、FDウィークの概要や、公開される授業の一覧を掲載した。オンデマンドの授業の動画もここにアップロードした。公開授業の参観・視聴可能期間は、11月4日から17日であり、教職員が授業

表1 商学部FDウィーク2022意見交換会

項目	商学部	時間配分
【開会の辞・趣旨説明】	司会進行 岸本徹也 商学部FD委員長	5分
【第1部～授業取り組みのポイント紹介～】		18分
(ア) 私の授業 ポイント紹介～授業参観の授業から～	佐藤佑介准教授「健康とスポーツ」 中川充准教授「経営戦略論」 名児耶富美子准教授「ゼミナール4」	(6分) (6分) (6分)
(イ) 第2部の説明		2分
～休憩～		5分
【第2部～授業参観の意見交換会～】	テーマごとにグループに分かれての意見交換	
ブレイクアウトセッション	テーマA 学生からの質問の受け方・フィードバックの方法	25分
	テーマB 学生のケアについて（授業での声かけ等）	
	テーマC 参観授業について	
	テーマD 授業評価アンケートの利用について	
【第3部 全体意見交換（自由テーマ）】	司会進行 高久保豊 商学部FD副委員長	25分
(ア) 趣旨説明		(1分)
(イ) ブレイクアウトセッションの振り返り	各グループが2分で報告	(8分)
(ウ) 全体意見交換		(14分)
【閉会の辞】	岸本徹也 商学部FD委員長	2分

を選択して参加または視聴した。

11月17日、オンラインで約1時間半、授業参観・視聴後の意見交換会を開催し、教職員51名が参加した。表1は意見交換会の予定された構成と時間配分である。意見交換会の第1部は、授業取り組みのポイント紹介ということで、学生による授業評価アンケートで評価点の高い教員3名から、授業のポイントについてそれぞれ6分の持ち時間の中で説明をもらった。この点については、第3章で詳しく紹介する。

第2部は、授業参観・視聴の意見交換を行うために、Zoomのブレイクアウト機能を利用し、テーマ別に7～8人のグループで意見交換を行った。テーマとして、「学生からの質問の受け方・フィードバックの方法」、「学生のケアについて」、「授業評価アンケートの利用について」等について話し合われた。この点については、第4章において、どのような議論があったのか詳しくまとめられているので、ぜひ読み進めていただきたい。

3 私の授業ポイント紹介

3.1 佐藤 佑介准教授「健康とスポーツ」

佐藤佑介准教授が担当する「健康とスポーツ」は、「健康」「スポーツ」「運動」をキーワードとして、受講生が関連領域の知識を広げて深められるように、①健康とスポーツに関する基礎的な知識を修得すること、②スポーツや運動が健康に与える影響について学ぶこと、③健康的にスポーツや運動を実践するための方法論について理解すること、④スポーツやトレーニングを実践、継続するための理論を把握することを目的と

している。

4つの目的の達成をめざして、受講した学生が、①健康とスポーツに関する基礎的な知識を説明できるようになること、②現代社会におけるスポーツの役割について論じることができるようになること、③スポーツや運動の実践に、科学的根拠や理論を応用できるようになることが授業の到達目標である。

授業は教室で対面の講義形式を基本とし、Google Classroom を活用して毎回課題が提示される。授業目的を達成するため、①受講生間の共同作業や討論、②個人の意見を他の受講生が共有する機会、③毎回の事前学修（課題）をもとにした反転授業などの学修方略を展開している。

PowerPoint のスライドは一部を資料として配付するが、受講生自身の能動的な授業参加を促すねらいから、すべてのスライドを配布することはない。PC やスマートフォン等の通信機能付き電子デバイスを持参して受講することを推奨している。

受講生の授業参加を促進するため、例えば、集団討論を活発に進めるための仕掛けづくりに力を入れている。まず、授業前に当日の授業にかかわる資料を Google Classroom にアップロードして、あらかじめ授業内容を学修させて意見や感想などを提出させる。授業では、冒頭で提出された意見や感想などを紹介して授業への内発的動機づけ²を高め、授業をとおして楽しみながら受講する状況をつくるようにしている。

その後、受講生は教室内の近接した席の人どうしで少人数の集団に分かれ、一人ひとりが学修した内容を説明し意見を交換する。集団内で意見交換が終わった頃を見計らって席替えをさせ、新たな集団のなかで再び意見を交換する。併せて、事前学修に関連する概念や理論などの専門知識を適宜講義して、受講生が基礎的な素養を学び身につけるようにしている。

このように、受講生が授業前にその内容に関心を抱くような課題を与え、授業中に参加する集団討論に積極的に動機づけるような働きかけをすることで、討論に能動的に参加しつつ発言内容が講義による専門知識によって補足されることによって理解が深まり自信につながると思われる。さらに、討論の内容をまとめるため、Google Forms, Mentimeter, text miningなどを活用して見える化し、事後学修への動機づけを高め、同時に自己効力感³の向上を感得できるようにしている。

15回の授業の各回は前後に関連づけられて全体が構成され、前回→今回→次回の一連の流れを形成している。また、受講生に対して双方向で授業が行われていることや、講義中に内容に沿って実際に身体を動かすよう受講生に指示するなど、一方的で単調な授業にならないように努めている。

3.2 中川 充准教授「経営戦略論」

中川充准教授からは「経営戦略論」について、「授業課題へのフィードバック」「テストへのフィードバック」に的を絞った、7分弱の授業紹介がなされた。この授業は2年生以上を対象とする半期科目であり、2022年度はオンデマンド形式で行われた。Google Classroom の登録者数が340名のクラスである。コロナ禍によりオンライン授業になってから、同科目の授業は同時双方向形式で実施されてきた。しかし、2022年度は対面授業が増えたこともあり、どのような環境であっても受講しやすくするため、オンデマンド形式で授業を行うこととなった。

本授業で中川准教授が留意したのは、今後の授業の進め方や、課題への解答時の注意事項、どういう点に気をつけて受講してほしいか、などを繰り返し伝えることによって、受講生が学修そのものとは異なるところで戸惑わないようにしたことである。また、オンデマンド形式は受け身の受講になりがちであるため、授業に参加している感覚を受講生が持てるように工夫した。

受講生は指定された動画を視聴した後、課題に取り組む。各回の課題へのフィードバックでは、受講生の優れた解答や特徴的な解答を紹介したり、皆の解答を一覧にして Google Classroom で提示したりした。受講生には、解答一覧に目を通し、自分の解答との共通点・相違点を認識した上で、他者の解答に対して建設

的なコメントを寄せ合う（書き込む）ように呼びかけた。この取り組みの狙いは、他の受講生たちの多様な解答・考え方を知ることによって刺激を受けたり、自分の解答に対するコメントをもらうことで満足感・やりがいを得たりすることである。この解答一覧について受講生は新鮮に感じたようである。

テストはオンラインでの中間テスト・期末テストである（不正と誤解されるような事態をなるべく予防し、受講生の不利益とならないようにするため、曜日・時限を指定して実施）。基本的な用語や概念の理解度チェックとして選択式の問題を出した。テスト実施後、受講生の得点の分布を示し、各問題のポイントなどを動画で説明した。この動画によって、受講生は自分の解答が間違っている理由や、自分の理解不足の点がどこにあるのかを知ることができる。中川准教授によると、動画の作成に多少の手間はかかるが、復習として効果的だと感じているとのことであった。

3.3 名見耶 富美子准教授「ゼミナール4」

名見耶富美子准教授からは「ゼミナール4」の授業について、8分弱の授業紹介がなされた。本授業は3年生以上を対象とする後学期科目であり、2022年度は主に面接授業で行われた。授業内容は研究テーマである「アプリケーションの設計と開発」のうち、各自がプロトタイプ（模型）の作成を通してアプリケーションの提案を行い、チームメンバーからフィードバックを得ながらビジネスモデルを構築するというものである。

授業紹介では、「ゼミナール1」から「同4」までと「卒業論文」を加えたゼミナール活動の全体像が示され、その中で3年次前学期からの学修目標であるプロトタイピングの技法についての紹介がなされた。具体例として、卒業生が作成したベビーシッターマッチングアプリのプロトタイプを取り上げ、学生自身がペーパープロトタイプからモックアップ（スマートフォンやタブレットPCで見られるような画面設計）に仕立てるまでの手順について概説した。このプロトタイプのモデルについて、作成者自身がプレゼンテーションを行い、他のメンバーからいかに意見を引き出し、多様なフィードバックを得るかという活動が「ゼミナール4」では重視されている。

今回、授業参観の対象となった「分析・仮説」の工程は、フィードバックに基づいた柔軟なモデル改良を可能にすることを目的としたもので、いわゆるアジャイル開発の手法に基づいている。ここで重要なことは、

- ①フィードバックを行う側（聞き手）は、後述するリーンキャンパスの各要素を自分なりに検討して、発表者に質問や提案を行う。
- ②フィードバックを受ける側（話し手）は、すべての提案や要求を採用できるわけではないことを認識した上で、採用できない場合にはその理由を明確に説明する。

の2点であると指摘する。

①に挙げたリーンキャンパスとは、A4サイズ1枚でスタートアップのビジネスモデルが可視化できるというツールである。ただ、これを学生個人で作成するのは非常に難しいので、本学非常勤講師である小倉博行先生のご協力を得て、ゼミナールの特別講義では全員でリーンキャンパスを作成するという取り組みも行っている。

名見耶准教授が学生に繰り返し伝えているのは、「日本大学商学部の4年間で学修する経営、会計、法律、保険、マーケティング等の分野について、担当の先生にどんどん質問して、自分のゼミで作成しているビジネスモデルを洗練することを心がけてほしい」という点である。これは、商学部での総合的な学びを本ゼミナールで体系的、実践的に活用していくことにほかならない。「先生方の授業が、このゼミナールの中で生かされてきていることが、このリーンキャンパスを見るとわかるようになっていきます」と名見耶准教授は結んでいる。

4 授業参観後の意見交換会

授業の進め方や学生への対応に関する4つのテーマに対し、全6グループに分かれ、Zoomのブレイクアウト機能を使って議論を行った。以下ではそれぞれのテーマごとの主要な論点および意見について概観する。

4.1 テーマA 学生からの質問の受け方・フィードバックの方法

この問題に関しては、面接（対面）授業とオンライン授業にわけて議論がなされている。

(1) 質問の受け方

1) 面接授業の場合

面接授業では、授業時間内に質疑応答の時間を設けると同時に、Google Classroom内に質問を受け付ける場所、例えば質問用のGoogle Formsを用意するという2つの方法を併用するケースが多く見受けられた。コロナ禍以前よりLMSであるNUeを活用している教員も見られたが、オンライン授業を契機としてGoogle ClassroomやGoogle Formsといった双方向型のコミュニケーションツールの利用が定着し、面接授業においてもそれが効果的に活用されるようになったことがわかる。

2) オンライン授業の場合

オンライン授業の場合、上記の面接授業と同じくGoogle ClassroomやGoogle Formsのような双方向型コミュニケーションツールの利用が多く見受けられた。

これに加えてオンラインの場合はZoomのチャット機能とGoogle Classroomのストリーム機能の使い分けについての意見も見られた。オンライン授業の場合、教員が授業中に対応すべき作業が多いため、質問を受けるツールを絞り込まないとコントロールが難しいことが挙げられる。

さらにZoomのチャット機能をうまく使うことで、受動的になりがちなオンライン授業を活性化させることができる可能性も示唆されていた。例えば質問に限らず、学生がそのとき感じた感想や疑問など積極的にチャットに書き込むことを促すことで、学生の理解が高まった事例も報告されていた。

(2) フィードバックの方法

面接授業における個別質問については、フィードバックも個別対応になるため、とくに議論すべき項目はなかったが、Google ClassroomやGoogle Formsを活用する場合には面接、オンラインともに質問者の匿名性に関する議論が見られた。Zoomの場合は限定公開コメントを使えば対応できるが、Google ClassroomやGoogle Formsの場合はそれができない。そのため全員が共有すべき重要な質問等については、本人への許諾確認、イニシャルでの公開など何らかの工夫が必要であることが議論された。

(3) 問題点

学生からの質問対応に関する問題点として、対応の煩雑性が指摘されていた。ツールが多様化して便利になる一方、さまざまなツールごとに対応しなくてはならないため教員の負担が大きくなっている。また個別対応のツールであるが故に、同じ質問に対して何度も回答をしなくてはならないという問題も指摘されていた。これらの問題については、質問期間を限定する、時間によってツールを指定する、回答を動画化して対応するなどのアイデアも提供されていた。

4.2 テーマB 学生のケアについて（授業での声かけ等）

この問題に関しての論点は大きく2つである。

（1）学生の発言促進と授業での共有・活用方法

一方通行とならないように、多くの教員がグループワークやディスカッションなど、講義の方法を工夫しているものの、発言をする学生が限られてしまったり、学生に問いかけても狙った反応を得られなかったりという課題が指摘され、教員からも具体的な方策が提案されている。とくに Google Forms など双方向型コミュニケーションツールをうまく活用することの有効性が指摘されている。

また学生一人ひとりをきちんと見ていることを示すことの重要性も指摘されている。少人数クラスの場合は名前を覚える、巡回中に声をかける、休みが続いたときに Google Classroom を介してコミュニケーションをとるなど、小さな積み重ねが学生の参加意欲の向上につながる点が挙げられている。

（2）学習意欲に差がある学生への配慮

まず参加意欲や積極性が低い学生への対応という議論がなされている。この問題は例えば1年生の自主創造の基礎などでは、グループワークへの参加意欲がそのまま出席率の低下につながるため、何らかの配慮が必要であることが指摘されている。

また複数の学年が混在する授業では、学年間でどうしても知識や経験に差が生まれるため、それがそのまま参加意欲の差につながる点が指摘されている。ただその対応については、グループの組み方、組み替えなど教員の積極的な対応の必要性が主張される一方で、ある程度の働きかけをしても態度変化がない場合は、あえてそれ以上関与しない方がよいという指摘も見られた。この問題は編入・転籍入学者においても発生していることもまた指摘されている。

4.3 テーマC 参観授業について

このテーマに関しては、個々の授業に対する感想や教員に対する質問が挙げられていたが、本稿の趣旨を鑑み論点の紹介にとどめておく。

（1）学生へのインセンティブについて

受講生からの優れた質問を引き出すためのインセンティブに関する議論が見られ、ポイントを与えることで積極的な質問が生まれることが事例として紹介されている。

（2）授業における工夫と情報共有

面接授業では前回、今回、次回への一連の流れ作りや双方向、ペアワークの方法、オンデマンド授業では、動画作成スキルなど、教員ごとにさまざまな工夫が見られることから、Google Classroom 等を通じたノウハウ共有の仕組みの必要性が論じられていた。

（3）オンデマンド授業継続の是非

上記に関連して、オンデマンド授業も多くの工夫がなされ、学生の知識習得や理解促進に有効な面もあることから、一律に面接授業にするのではなく一部はオンデマンド授業も継続してもよいのではないかとの指摘が見られた。

4.4 テーマD 授業評価アンケートの利用について

(どのように利用しているのか、アンケート以外にどのような方法で学生の意見を集めているか)

(1) 実技科目のアンケート

このテーマに関しては、現行のアンケートが実技科目仕様ではないことから、体育担当教員が独自に組織的な対応をしていることが報告されている。これはアンケートの実施だけでなく、情報の共有にまで及んでいる。

(2) アンケートの活用

前述の体育担当教員グループでは、種目を選んだ理由（抽選科目の需要把握）、実技への不満（学生へのフィードバック）など、そもそも目的意識を持った上でアンケート項目が設定されていることが報告されている。

(3) 分野ごとのアンケート、共有の可能性

現在実施されているアンケートが、科目や分野固有の課題に対応していなかったり、その後の活用が難しかったりすることがあるため、領域ごとにアンケートを実施したり、情報共有を行ったりすることの必要性についても議論がなされた。

5 むすびに

令和4年度の商学部FDウィーク2022は、教員が授業参観から学んだことについて意見交換し、自身の授業に生かすことを目的に実施した。具体的には、「一方向的な授業にならないように留意している」「動画のどこについて話しているのか、矢印で示すなどして明確になるよう工夫されていた」「前回の授業と今回の授業との関連づけ、また次回の授業への繋げ方が見事である」「英語による説明と日本語での説明の切り替えが見事であることや、受講生のペアワークがうまく行われていた」などの感想にもとづいて、受講生の評価が高い授業の構成や進め方などを論議した。

高評価の授業について、参考になる工夫や取り組みをまとめると次のようになる。

- ① 一定の時間をかけて授業内容を練り上げ、多様な教材や教具を使って講義している。
- ② 受講生を授業に参加させるように働きかけている。
- ③ 授業中に受講生どうして意見を交わす時間を設けて考えを共有させている。
- ④ 課題などを提示して授業の予習・復習をさせている。
- ⑤ 授業内容に関する受講生の質問などに適切にフィードバックしている。

以上の諸特性を検証しつつ、参考にすべき工夫や取り組みを引き続き探究することを今後の課題としたい。

注

1. 今までの商学部のFDに関する取り組みについては、松原・高久保・竹林・武田（2022）が詳しくまとめている。
2. 内発的動機づけは、知的好奇心、達成感などの総称で、行動や学習自体に内在する推進力を意味する。デシ（デシ・フラスト、1999）によると、人は自分自身の内から生ずる楽しさ、達成感、充実感などの内的報酬による動機づけのほうが、やる気や意欲が持続するという。
3. 自己効力感は、ある状況下で必要な行動を効果的に遂行できるという確信を意味する。バンデューラ（バンデューラ、2019、2020）の社会的学習理論によると、ある行動が導く結果の期待とその行動を遂行できるという効力の期待とから成り立つ。自己効力感によって行動の選択、持続性、努力量などが影響されるという。

引用・参考文献

- A. バンデューラ（祐宗省三・原野広太郎・柏木恵子・春木豊 編）（2019）、『新装版 社会的学習理論の新展開』金子書房。
- A. バンデューラ（原野広太郎・福島脩美 訳）（2020）、『新装版 モデリングの心理学—観察学習の理論と方法—』金子書房。
- E. L. デシ・R. フラスト（桜井茂男 訳）（1999）、『人を伸ばす力—内発と自律のすすめ—』新曜社。
- 松原聖・高久保豊・竹林一志・武田圭太（2022）、「近年の商学部・大学院商学研究科のFD活動」『日本大学FD研究』第9号、63-77ページ。

